

太宰府政庁跡(太宰府市)

ここが大和朝廷の朝鮮半島政策のための外交・軍事上、重要な拠点であった太宰府政庁跡/特別な権限を持たせた軍事・行政機関が置かれた直轄地





文化庁 文化遺産散策マップ より

ここが太宰府政庁跡入口/足元にプレートが埋め込まれている





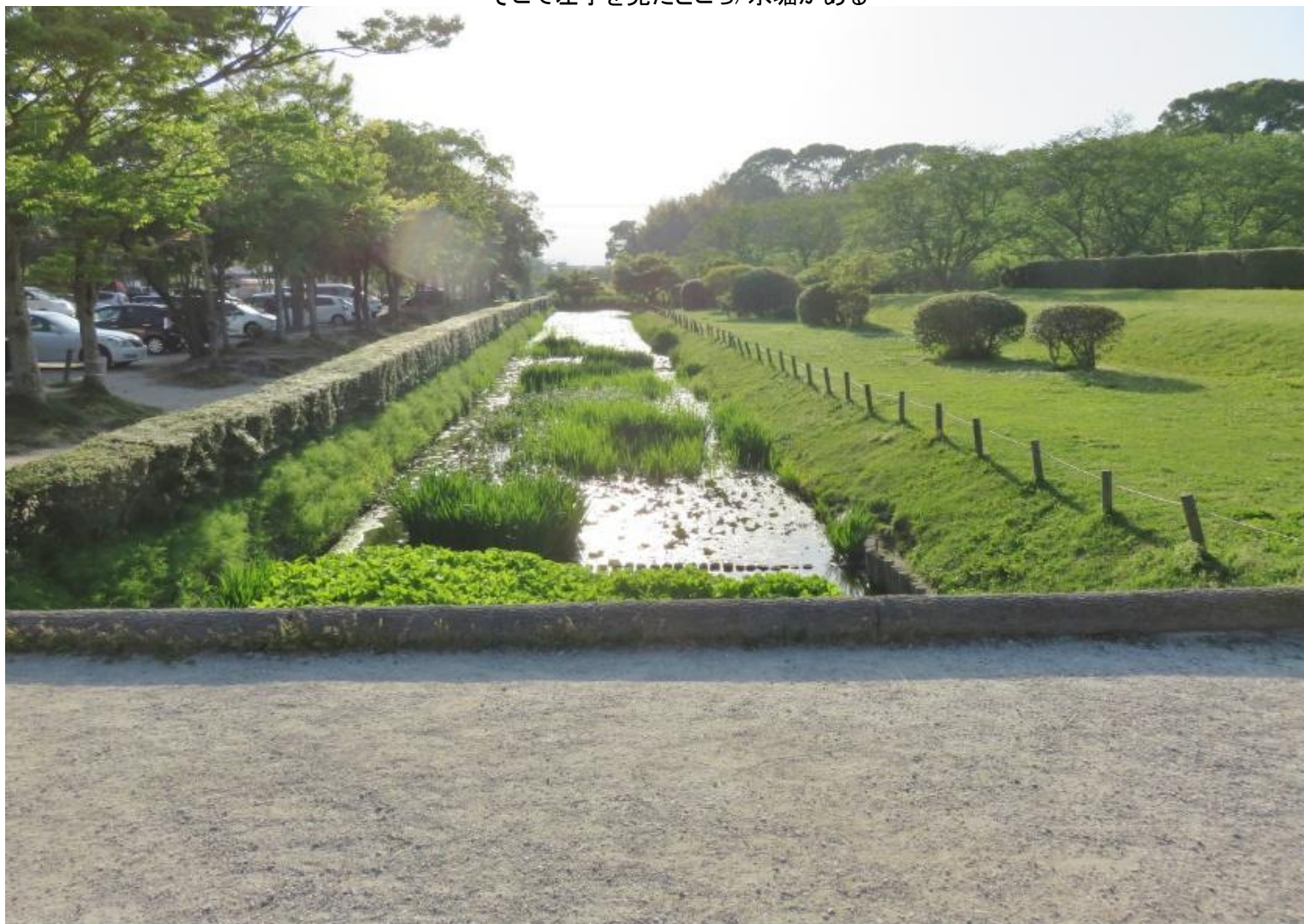
標柱が立っている/左手は「史蹟 太宰府趾」、右手は「都府樓之趾・・・」と記されている



前方(北方向)に大野城があった四王寺山が見える/階段の上に南門跡がある/さまざまな説明板が立っている



そこで左手を見たところ/水堀がある



同じく右手を見たところ



発掘調査によりⅠ期からⅢ期に時期区分されている/7世紀の後半に始まり、12世紀のうちには廃絶したと考えられている



外国使節を迎える都としての機能を担った



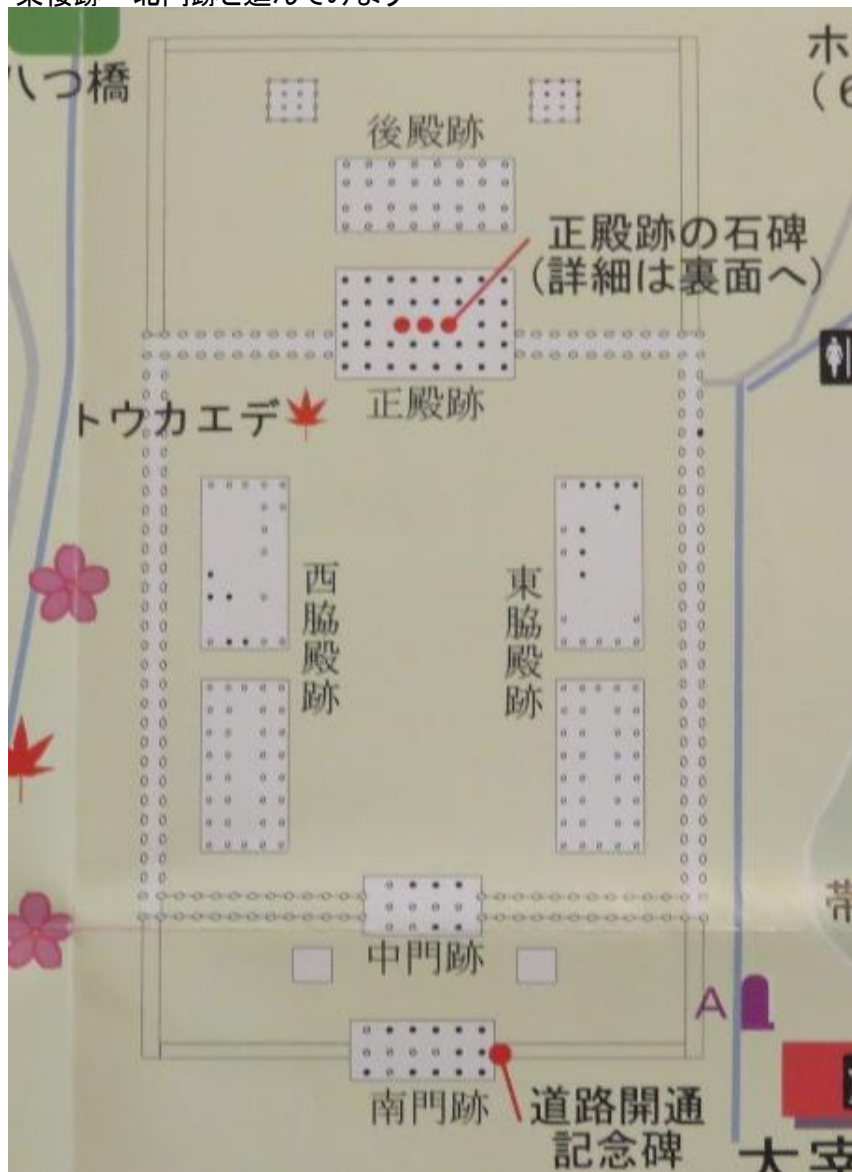
太宰府市日本遺産活性化協議会 パンフレット より



大宰府政庁復元模型（九州歴史資料館）

財団法人 古都大宰府保存協会 2009大宰府政庁跡冊子 より

南門跡→中門跡→西脇殿跡→東脇殿跡→正殿跡→後殿跡→西楼跡→東楼跡→北門跡と進んでみよう





特別史跡 大宰府跡

大宰府政庁南門跡

所在地 太宰府市観世音寺4丁目539-1 ほか
指定日 昭和28年3月31日

南門とは

南門は政庁の南に開かれた正門である。両側には東西に延びる築地塀が取り付き政庁全体を囲んでいた。要人や外国の使節を応接するにふさわしい威容を誇っていたであろう。なお役人の日常の出入りには築地塀に設けられた脇門を利用していたと考えられる。

発掘調査でわかったこと

南門跡は中門跡とともに、昭和43(1968)年に大宰府跡で最初の発掘調査がおこなわれた場所である。この調査によって地表面に見える礎石群は奈良時代(政庁第Ⅰ期)のものではなく、平安時代後半(政庁第Ⅱ期)に建て替えられた時のものであることが判明した。建物の平面形は変わらないが、基壇(建物土台)は拡張されておりⅡ期に比べて大きくなっている。基壇の中央部から水晶や琥珀を納めた鎮壇のための須恵器壺が完全な形で出土した。この壺はⅡ期の門の築造年代を知る有力な手がかりとなった。

礎石は11個残っていた。調査結果をもとに平面復元を行った。現在見えている礎石は右図のように本来の位置のもの、移動されたもの、コンクリートで新しく作ったものの3種類がある。なお両側の柵は築地塀を表示している。

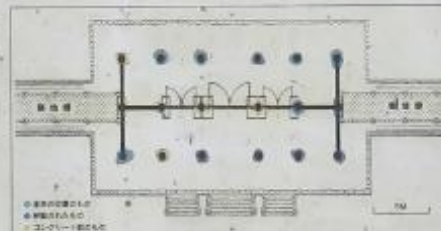
南門の復元模型

これまでの発掘調査の成果と、現存する古代建築の構造・意匠を参考にして、想定復元した模型が右の写真の建物である。復元された南門建物は、高さ18.2m、正門5間(21m)、奥行き2間(8.2m)の規模を誇り、正面入口には3ヶ所の扉が設けられていた。また、大宰府の玄関口としてふさわしく、2階建て入母屋造りの屋根をのせた、壮麗で堂々とした門だったようである。

昭和43年の発掘調査



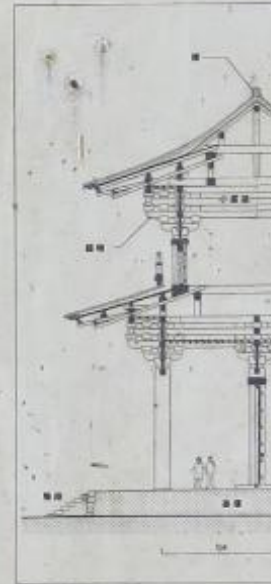
遺構重複状況模式図



南門平面図



南門復元模型



南門断面図

ここが南門跡



礎石が残っている



南門から正殿方向を見たところ/すぐ正面は中門跡(礎石が見える)



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



ここが中門跡/礎石が残っている





中門跡から東に延びる回廊跡を見たところ



さて、これは中門跡から正殿跡方向(北方向)を見たところ



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



これは西脇殿跡を南側から北方向に見たところ



西脇殿跡の西側に沿う回廊跡を見たところ



そこから西脇殿跡越しに北東方向を見たところ



同じく東に延びる回廊跡を見たところ



これは東脇殿跡を南側から北方向に見たところ



東廻廊跡の東側に沿う回廊跡を見たところ



そこから東脇殿跡越しに北西方向を見たところ



これは南側から正殿よりの東脇殿跡を見たところ



北側から正殿よりの東脇殿跡を見たところ



これは南側から正殿よりの西脇殿跡を見たところ



北側から正殿よりの西脇殿跡を見たところ



そこから正殿跡を見たところ/石碑群が立っている





特別史跡 大宰府跡

大宰府政庁正殿跡

所在地 太宰府市観世音寺4丁目530ほか
指定日 昭和28年3月31日



平成11年の発掘調査
(覆土を除いたようす)

正殿跡とは

大宰府の長官である帥が政務を執り、これと関わる儀礼や儀式で最も重要な役割を果たした場が正殿である。大宰府は中央政府の縮小版として西海道(九州)の管内諸国を統轄していた。宮都での元旦拝賀を参考にすれば、大宰府でも元旦には管内諸国から国司らが集い、正殿に座した帥に拝賀する儀礼が行われたと思われる。このように正殿はその政治的秩序を保つための威厳に満ちた建物だったことだろう。

発掘調査でわかったこと

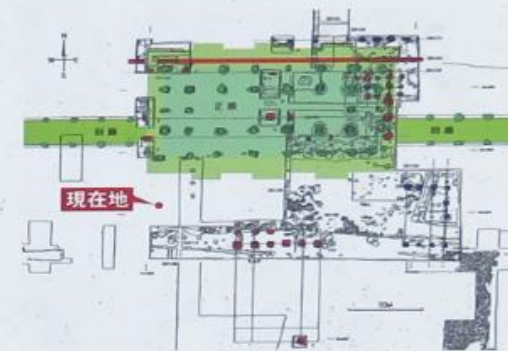
政庁の建物群は3期(I~III期)にわたって変遷し、I期は掘立柱建物、II・III期は礎石建物が採用され、中・南門の建物についてはII期とIII期がほぼ同じ規模と構造だったことが判明している。近年の調査では、正殿も他と同様にII・III期の基壇(建物の基礎)が同一規模で建替えられていたことが明らかになった。この建替えの原因となった941年藤原純友の乱による火災を示す焼土や炭をIII期整地層の下部で確認した。さらに、基壇の下層でI期の掘立柱建物・柵・溝等を発掘した。これら建物群はいずれも規模が大きく整然と配置され、周囲を柵と溝で区画していることが判明した。すでにI期の段階から儀礼空間を意識した配置だったと考えられる。



平成11年の発掘調査
(基壇を断ち割ったようす)

正殿の建物

残された礎石からIII期の建物は正面7間(28.5m)、奥行4間(13.0m)の平面規模がわかっている。また基壇の正面と背後には3つの階段が取り付け、正面を除いた周囲の礎石には壁を設けるための加工が施してある。柱は直径が約75cm、これをのせる礎石は巨大で、しかも円形の柱座を3重に削って装飾している。こうした調査成果と正殿の役割から考えると、建物は寄棟の大屋根と庇を別構造で組み合わせ、朱塗の柱と白壁で仕上げた外観、そして内部を吹抜けのホールのような空間にした建築だったことが想定できる。屋根には左のような恐ろしい形相の鬼瓦が飾られていた。



正殿遺構配置図

II・III期の礎石建物(緑色)の下部からI期の掘立柱建物(青・赤色)が見つかった。



正殿の礎石に紙の柱を立ててみた (図は正殿の復元建物)



重要文化財 大宰府跡出土鬼瓦

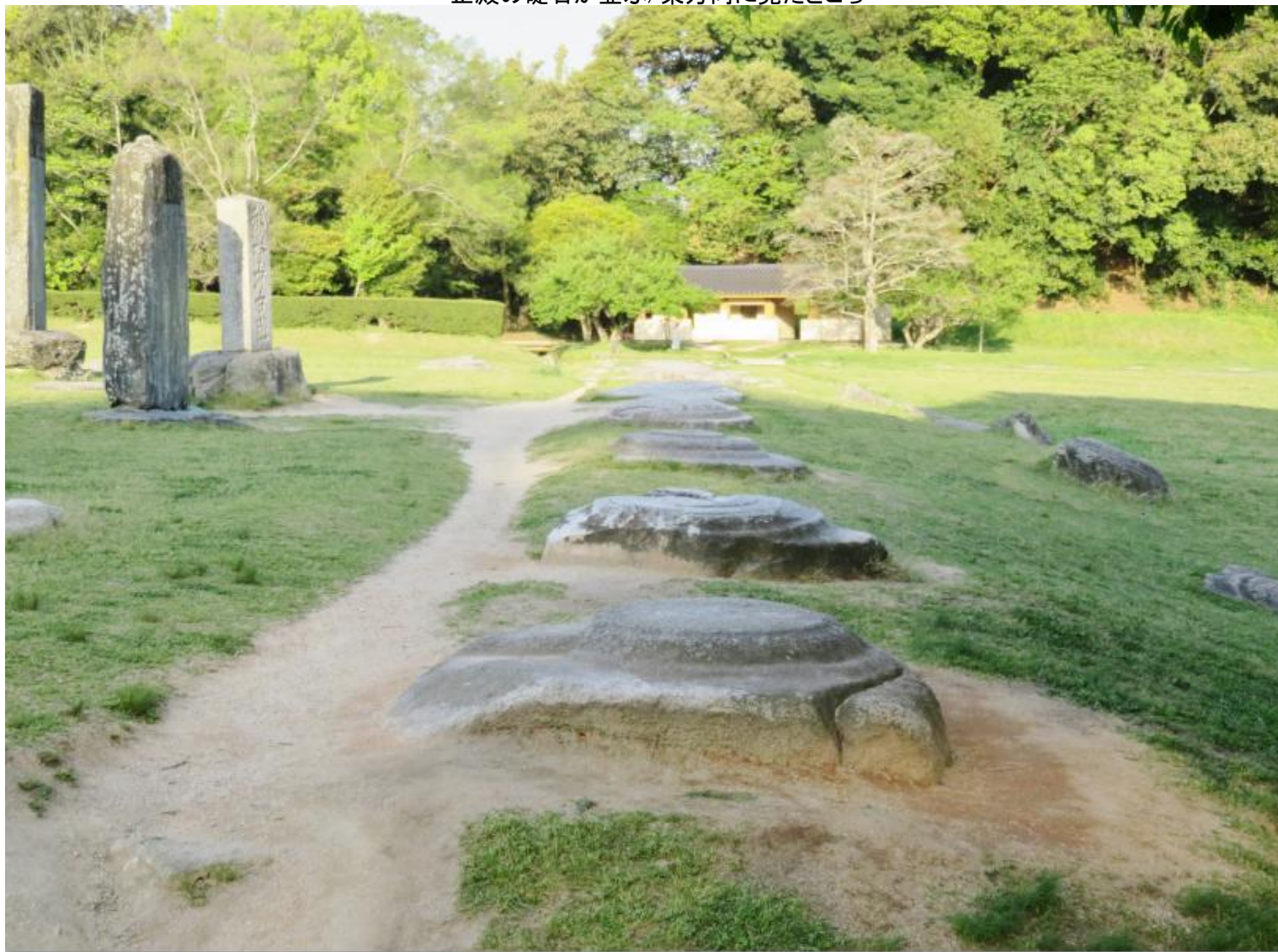
正殿基壇跡に立てられている石碑群/中央に位置する「都督府古趾(ととくふこし)」碑は1871年に高原善七郎が造立した/左側の「太宰府址碑」は1880年に地元の人々が造立した/右側の「太宰府碑」は1914年に亀井南冥の門下生らが造立した



正殿基壇跡を西側から東方向に見たところ



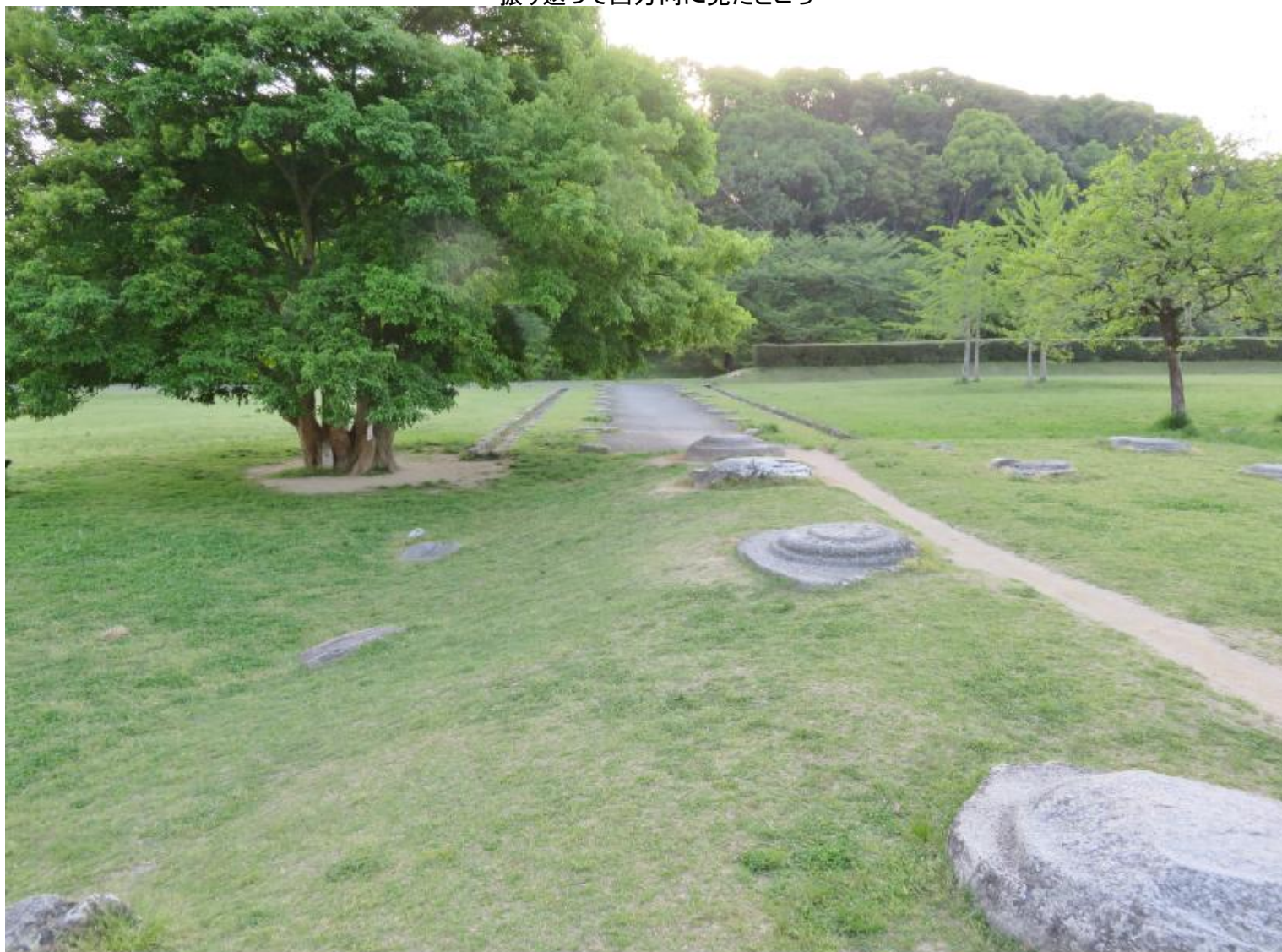
正殿の礎石が並ぶ/東方向に見たところ



その先の回廊跡を見たところ



振り返って西方向に見たところ



これは正殿跡から南門方向を見たところ



そこで左手を見たところ/東脇殿跡が見える



同じく右手を見たところ/西脇殿跡が見える



さて、正殿跡から北方向を見ると後殿跡がある





南東側から北西方向に見たところ



後殿跡から正殿跡越しに南方向を見たところ



これは後殿跡の北西側にある西楼跡





西側から見たところ



これは後殿跡の北東側にある東楼跡





南東側から見たところ



ここは後殿跡の北側にある北門跡/両サイドの植え込みは築地を表している



そこから北方向を見たところ



左手を見たところ



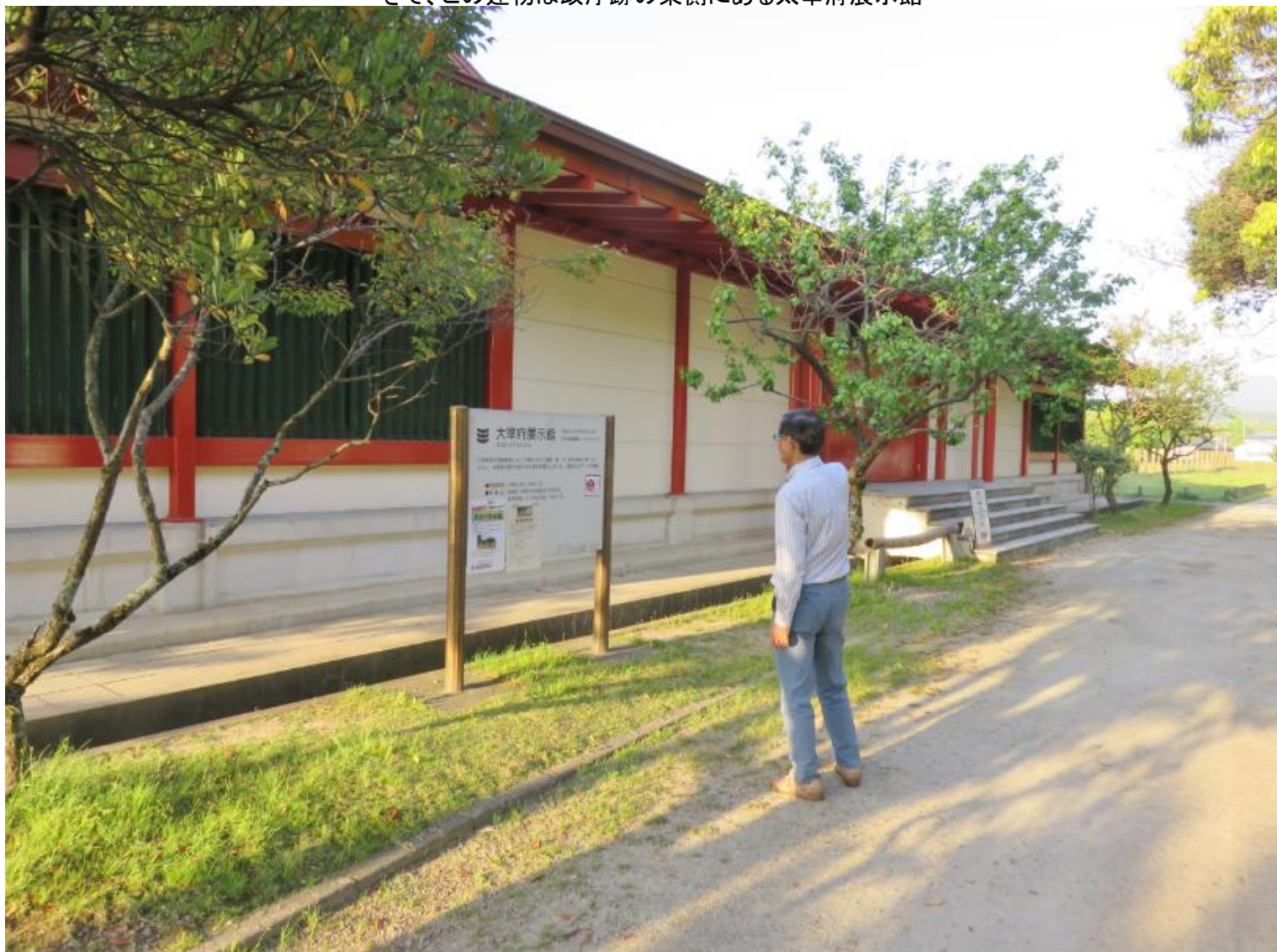
右手を見たところ



更に右手の築地を表す植え込みを見たところ

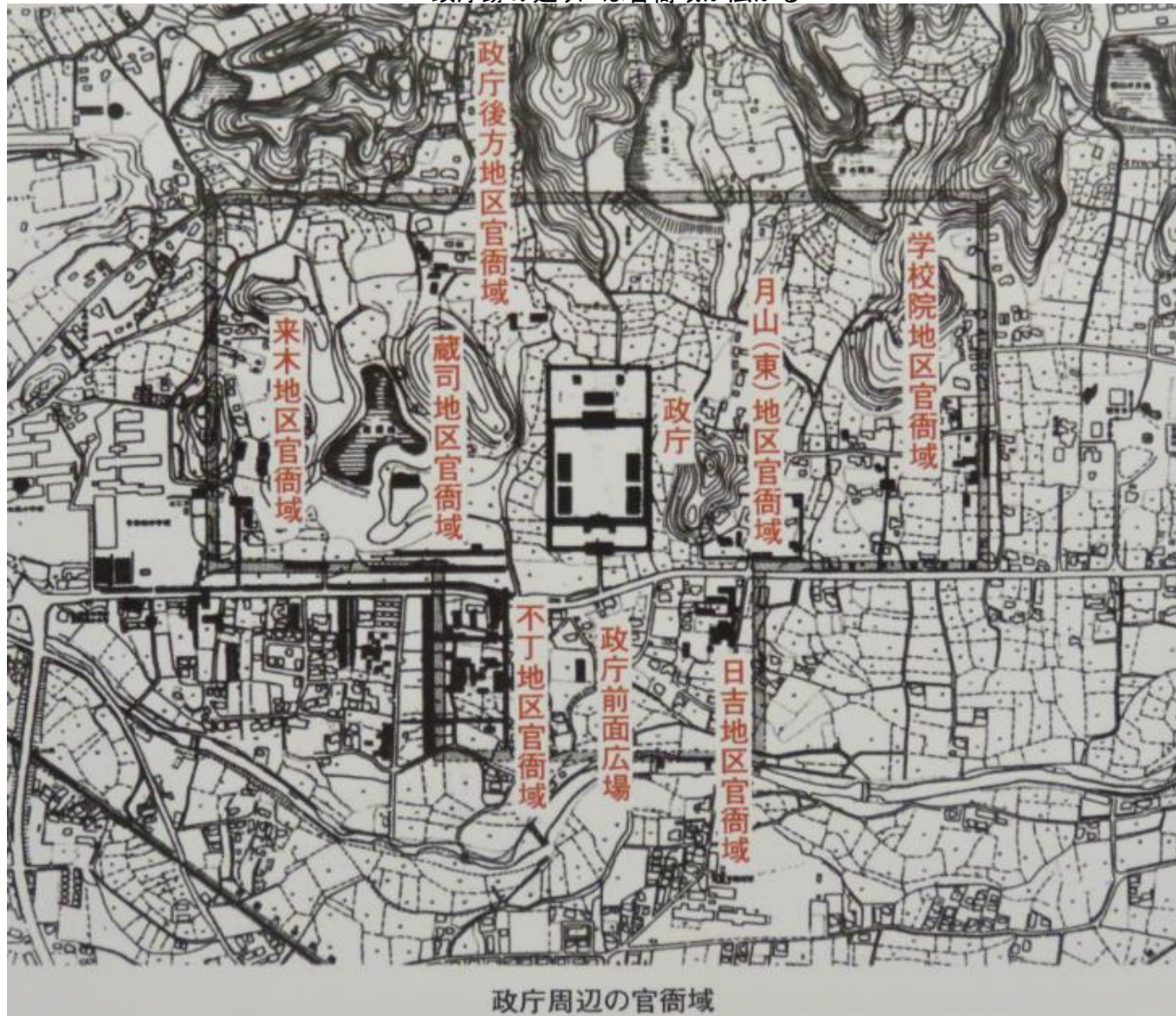


さて、この建物は政庁跡の東側にある太宰府展示館





政庁跡の廻りには官衙域が広がる



ここは政庁跡東側にある月山(東)地区官衙域のエリア



このエリアからはこれまで9棟の掘立柱建物が確認され、8世紀の初めから10世紀の終わり頃まで3時期にわたって所在したと云う



この長い杭は塀の位置を表しているようだ



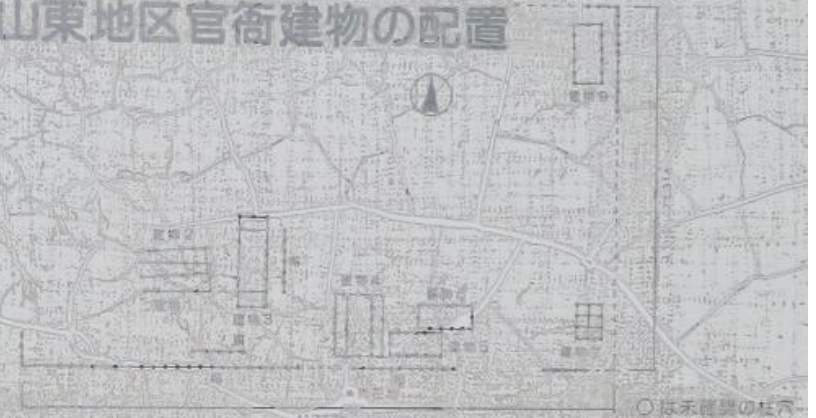
説明坂が立っている



月山東地区官衙

政府周辺の官衙

月山東地区官衙建物の配置



(月山東地区官衙)

大宰府には記録から「政所」「蔵司」等の実務を行なう官衙（役所）が18あったことが知られている。これらの官衙の多くは政府の周辺に設けられていたと考えられ、これまでの発掘調査で、役所として使われたと考えられる建物が多数見つがっている。これらの建物は溝や塀で区画されており、現在、大きく7つの地区に分けられる。この官衙はそのなかの1つである。

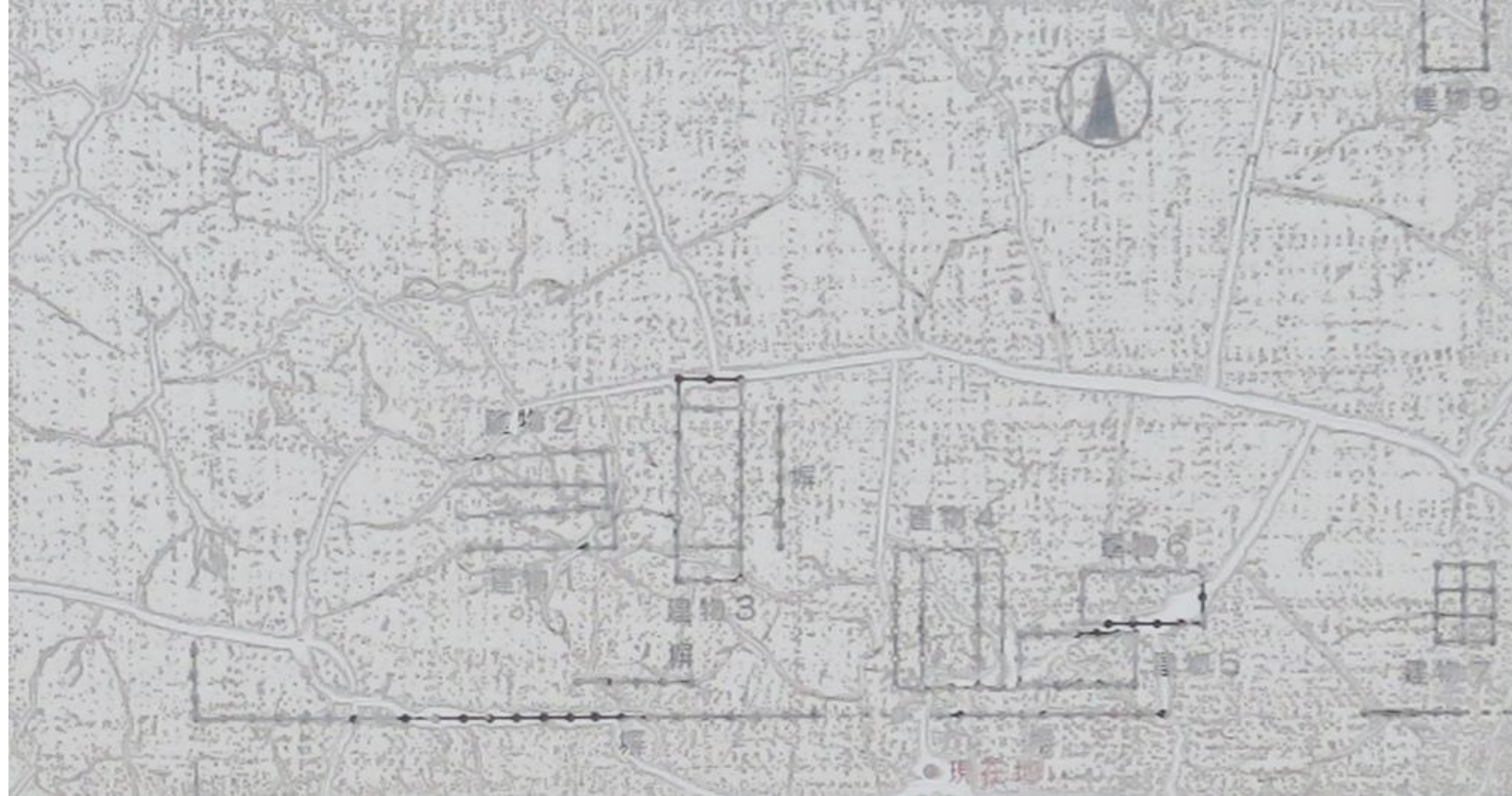
政府の東側に隣接する「月山東地区官衙」は東西約112m、南北約71mの堀で囲まれた中に、これまで9棟の掘立柱建物が確認されている。年代的には8世紀の初めから10世紀の終わり頃まで、3時期にわたっている。

建物4は四面廂の中心的な建物とみられ、また南北に廂をもつやや特異な建物3や建物7のような倉庫も付設されている。

この地区の役所がどのような役割をもち、何と呼ばれた役所であったのかは今のところ明らかでない。

福岡県教育委員会

月山東地区官衙建物の配置



こちらは説明坂の右手



このエリアに建物3～6があったようだ



これは説明坂の左手にある建物3の位置を表す杭/右手の長い杭は塀の位置を表す



反対側から建物3を見たところ/右手に見えるのは建物1~2



手前が建物2、奥が建物1のようだ



右手が建物2、左手が建物1のようだ



奥が建物2、手前が建物1のようだ



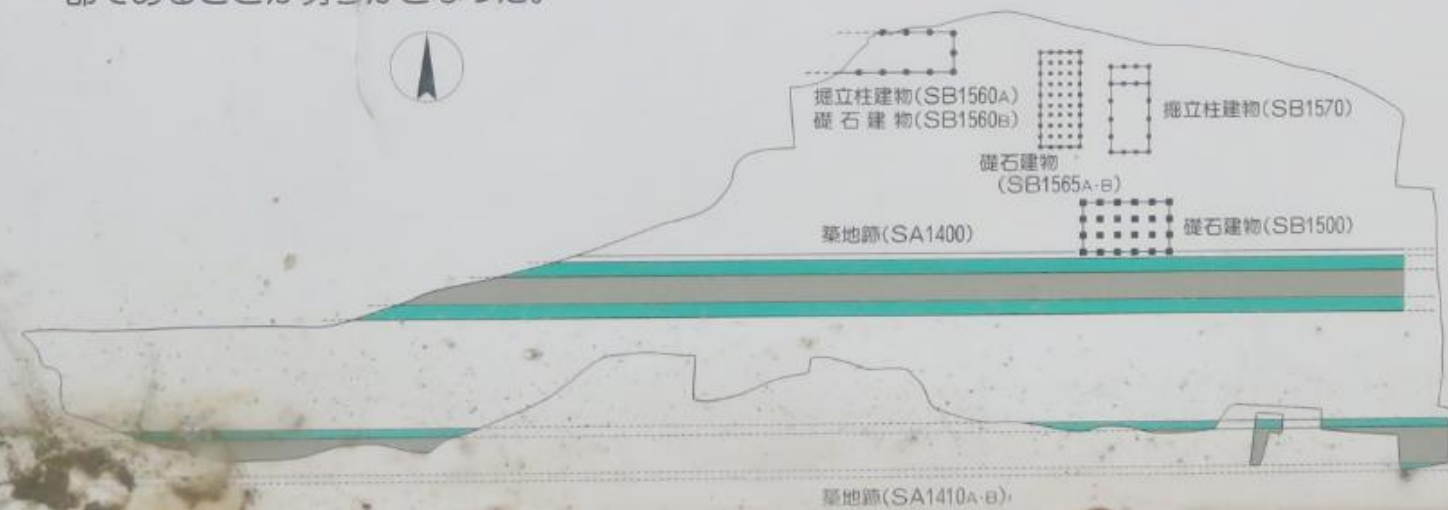
さて、ここは政庁跡西側にある蔵司地区官衙域のエリア/説明坂が立っている



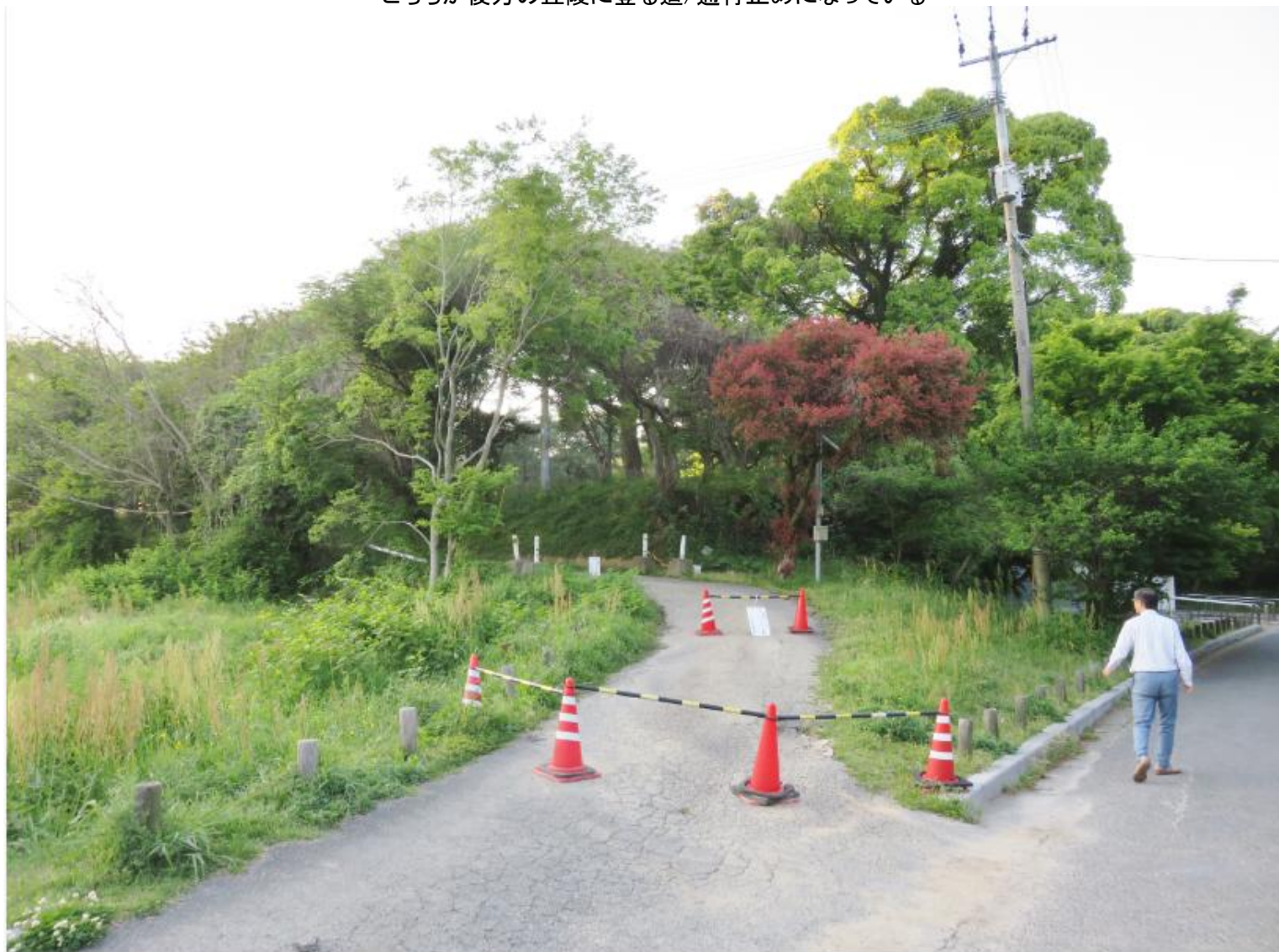
蔵司地区^{かんが}官衙

大宰府には実務を行う19の役所があったことが知られている。その多くは政庁の周辺に設けられていたと考えられる。政庁の西側に位置する丘陵は、現在、字名から「蔵司」と呼ばれている。「蔵司」は、もともと西海道(九州)九国三島(後に二島)の綿・絹などの調庸物(税)を収納管理する役所である。集められた調庸物は一旦ここに納められ、その後一部は都に進上された。

後方の丘陵上に礎石建物(倉庫)1棟が存在することは早くから知られていたが、1978年・1979年にこの丘陵の前面地域が発掘調査され、二重の築地と、その内部に建物5棟が新たに見つかった。これらの築地や建物は、8世紀～11世紀前後にわたって営まれており、「蔵司」を構成する建物の一部であることが明らかとなった。



こちらが後方の丘陵に登る道/通行止めになっている



しばし、その方向を覗いてみる



奥にブルーシートが見え、発掘調査が行われているようだ



なお、政庁跡付近には、さまざまな石碑が立っていた



あをによし 寧楽の京師は

咲く花の 薫ふがごとく

今さかりなり

小野 老

原文 青丹吉 寧楽乃京師者 咲花乃 薫如 今盛有

万葉集卷三十三二八

大意 奈良の都はにおうように花が美しく咲き、今まっ盛りである。

大宰少貳小野老朝臣あてみが天平元年（729）大宰府に着任した時、宴席で披露した歌とされている。揮毫者の犬養孝氏いぬかいただしは万葉風土の大切さを訴え、若い頃から幾十度となく大宰府政庁跡の巨大な礎石の前にたたずんでは、古代の絵巻を繰り広げてくれる「遠の朝廷」とほのみかどを偲び、都から離れた官人の心情を思いやられた。

碑文は昭和二十四年に作られた「万葉百首」まんしやくひゃくしうのかるたから拡大して刻した。

この歌碑は「遠の朝廷」を偲び、都から離れた官人の心情を思いやられた。文化の景観税で制作して、





やすみしし わご大君の 食国は

倭も此処も 同じとぞ思ふ

大宰帥 大伴旅人

原文 八隅知之 吾大王乃 御食國者 日本毛此間毛 同登曾念

万葉集卷六 九五六

大意 私がお仕えする大君が、安らかにお治めになる国は、中央の大和も

ここ大宰府も同じ、異なることはないと思っている。

大宰帥として赴任したばかりの大伴旅人にむかい、少弐（大宰府の次官） 石

川足人が

さす竹の大宮人の家と住む 佐保の山をば思ふやも君

（大宮人が家として住んでいる平城の佐保の山を、あなたはなつかしく思いになるでしょうか）

と問いかけたのに対して、旅人が和えた歌である。ここでは旅人は、遠の朝廷大宰府の長官としての気概を詠っている。

この解説板は「歴史と文化の環境税」で作成しています。

参考ホームページ

<http://www9.plala.or.jp/kinomuku/dazaifu/dazaifu.html>

<https://dazaifu-bunka.or.jp/info/spot/detail/19>

<https://www.kyuhaku.jp/dazaifu/d-map/kaisetu01.html>

http://www.geocities.jp/kakitutei_pickup/mizuki/dazaifu2.html

<http://saigokunoyamaiiro.blogspot.com/2013/03/461.html>

http://drive-nikki.com/dazaifu_seicho.html

